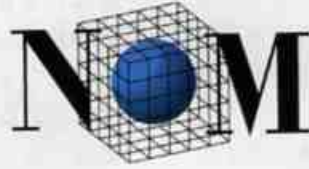


新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第16号

2001.4

ココロの形—出品作品をめぐって

21世紀 子どものための美術展 ココロの形・カタチの心

4月14日(土)~5月27日(日)

人間、生きていくと、毎日毎日いろいろなことがあって、いろいろなことを感じたり、考えたりします。そんな日々の心の動きが積もっていくことで、ひとりひとりの人生が彩られていくのかもしれませんが。春の企画展「ココロの形・カタチの心」は、そんな人間の心の動きや積もった心を見つめ直してみようとする展覧会です。

たとえば、最初に、顔を扱ったコーナーがあります。赤ちゃんが一番多く目にするのはお母さんの顔でしょう。また、初めて自分で意識して描く絵も、おそらく「○○ちゃんの顔」なのではないでしょうか。小さな子どもは、よく動いて様々な表情をする顔に興味を持つのだとか。大人にとっても、やはり顔は心の窓として興味をつきないモチーフであるようで、顔を題材にした作品はとてたくさんあります。

このコーナーの中では、能面も紹介しています。能面は物語の登場人物の顔にあたりますから、その役にふさわしい表情をしています。たとえば、「ハヤシ節郎男」は、人生に悩む哲学青年。眉間にしわを刻んだ憂愁の表情をしています。その一方、若くて優しい貴婦人を表した「小面」は、一見無表情にも見えるものです。しかしこれをひと

たびシテがかぶると、用い方によって生き生きと様々な表情を見せるのです。これは中間表情とか無限表情とか呼ばれるもので、喜怒哀楽すべてを含む面なのです。物語の持続した時間の流れに対応するために生まれた表現なのでしょう。絵画作品で出品される吉原治良の「涙を流す顔」などは、悲しみだけを強調した、いわば瞬間の表現であり、対照的です。

また、手の表情に注目するコーナーがあります。手は、なかなか表情豊かです。たとえば、「手に汗握る」という言葉がありますが、ハラハラするときは思わず手を握ってしまったりします。ほかに、怒ったとき、がっかりしたとき、悔しいとき…それぞれに手に力が入ったり抜けたり、独特の表情をするのではないのでしょうか。画家や彫刻家が手だけの習作を作ることがあるのは、そんな豊かな手の表情をよく知っているからなのでしょう。

作品の中には、ストレートな感情表現とは違う、静かなものもたくさんあります。舟越桂の作品や、宮脇晴の自画像などがそれです。それでも、じっくりみていると、何かより深い精神性が滲み出てくるのを感じるはず。そんなじみじみとしたコーナーもあります。

生きる喜び エルミタージュ美術館名品展

7月6日(金)~9月5日(水)

「神と人間」から5年、2度目となるエルミタージュ美術館の展覧会が今夏開かれます。エルミタージュ5部門を総動員し全体像を示そうという基本構想はそのままに、主題が一新され「生きる喜び」となりました。時代・文化の異なる多彩な美術品が勢揃いする予定です。

総数270万点以上という莫大な所蔵品が、綿々と連なれば全長20キロメートル以上という展示室に並ぶ巨大な博物館エルミタージュ。青緑色と白を基調にした冬宮の壮麗な外観は印象的です。ところが、1914-16年の間西欧に留学した新潟出身の洋画家高村真夫は、帰国の途すがらエルミタージュを訪れて、「赤く塗られた冬宮」と述べています(『欧州美術巡礼記』1917年)。しかし、これさえも建築当初からの色ではありません。その色は、旧帝都を描いた数々の景観図—今回ロシア文化史部門に出品されます—の中でご覧ください。

帝都サンクト・ペテルブルグを築いた偉大なるツァーリ、ピョートル大帝(1672-1725 在位1682-1725)に次ぐ名君として親しまれているのがエカテリーナ2世(1729-96 在位1762-96)です。西欧の思想家と交流したこの啓蒙君主は、優れた美術品の収集も行っていました。公務を離れて身

近な人々と過ごす「隠れ家」でそれら名作を鑑賞していたのです。そのコレクションが元になっているので、美術館に「エルミタージュ」の名が付けられているのです。

今回西洋美術部門では、エカテリーナ2世時代に重なる18世紀フランスのロココの美術で幕を開けます。宮廷で好まれた、洗練された軽やかな絵画は、「生きる喜び」にあふれています。今回出品のヴァトーの秀作を始めとする幾つかは、まさしく女帝の時代に集められたものなのです。その作品を、時代を超えて今日本で私たちが目にすることになるわけです。また一方で、ピョートル大帝も珍奇なものや美術品を集めさせており、原始文化史部門で出品されるスキタイの黄金美術の中には、大帝のコレクションに収められていたものがあります。

このような様々な繋がりの中で作品を見ていくと、歴史の厚みを感じられ、鑑賞の深みも増すのではないのでしょうか。巨大な本家エルミタージュの姿を縮約して伝える贅沢な展覧会であるからこそ楽しめることです。

最後になりましたが、今回特筆すべきは東洋美術部門です。トゥルファン(現中国新疆ウイグル自治区)の大壁画《請願図》が30年ぶりに公開されるのですから。この

「子どものための美術展」と銘打ちつつも、大人の方にも楽しめる展覧会です。美術入門としても最適。ぜひ、普段美術館にあまり来ない近所のお友達を誘っておいで下さい！
 (主任学芸員 宮下 東子)



中村正義(顔) 1973年 中村正義の美術館



田島征三(わっはっは) 厚紙より



吉原治由(涙を流す顔) 1949年 大阪市立近代美術館絵巻複製室

ような貴重な作品の移動、輸送に問題が伴うのは当然ですが、時間と労力をかけ特別に修復を行うことでエルミタージュは出品を可能にしてくれました。友好と信頼こそが「生きる喜び」の源にあるものなのです。

(主任学芸員 桐原 浩)

＊新潟県内の小・中・高校生は、夏休み期間中に教育活動として観覧する場合には観覧料が免除されます。詳しくは学校にお問い合わせ下さい。



ジャン=アントワーヌ・ワトール(園つた車出し) 1715-18年



フィードル・ステパノヴィッチ・ロコトフ
 (エカテリーナ2世の肖像)
 (A.ロスリンの原画に基づく)
 1780年代



(複製図) 新羅ウイグル自治区ベセクリク石窟第15窟出土 壁画断片 9-10世紀

美術館の楽しみかた

「美術館＝展覧会を見に行く場所」。そう思っていないでしょうか？もちろん、展覧会は美術館の活動の中心となる大きな柱です。けれども、より多くの方に美術館へ足を運んでいただくために、その他にもいろいろな催しを行っていることをご存知でしょうか。展覧会に比べるとその情報が皆様の目に触れる機会が少ないかもしれません。そこで今回、いつもは展覧会の影に隠れがちなイベントを、皆様にご案内しようと思います。

まず、**美術鑑賞講座**。美術館で働く学芸員の専門分野は西洋絵画、日本画、洋画、彫刻、工芸、書など様々です。年に1人1回、自分の研究テーマに沿った講座をしていますが、日頃の研究成果を皆様へ聞いていただく貴重な機会ですので、私たちも張り切って準備をしています。年に4本の企画展では全ての分野を網羅することはできません。今年は好みの展覧会がないかと思っている方も、ぜひ講座のプログラムをチェックしてみたいかでしょうか。企画展は学芸員による研究の積み重ねによって生まれます。お聞きいただいた講座がもとになって、何年後かの展覧会が出来上がるかもしれません。

次に、**ワークショップ**。聞きなれないカタカナ語を敬遠される方もいらっしゃるかと思いますが、参加型の催しを通して美術に親しんでいただく機会です。本年度の第一弾は4月15日から始まる「ココロの形・カタチの心」展に合わせて開催します。「表情」をテーマに、工作と笑いの演技を通して、展覧会とその作品の理解を深めていただきます。お子様から大人の方まで、幅広い参加者を募集中です。ふるってご参加ください。

また、美術館で映画を見ることもできます。**映画鑑賞講座**では、懐かしい名作や、芸術関連の映画を上映しています。昨年度はヒッチコックの「サイコ」、三隈研次の「斬る」など。また、写真展に合わせて「アンリ・カルティエ・ブレッソン 疑問符」を上映し、ご好評いただきました。本年度は、昭和30年代、ある一家にテレビがやってくるまでの数日間を描いた小津安二郎のほのほのとした佳品「お早よう」などを予定しています。ロードショーでは物足りないと思われる方、ぜひお越しください。

ミュージアムコンサートも忘れてはいけません。ホールやライブハウスとは一味違った空間で音楽を楽しんで

いただく機会です。これからも美術館ならではの音楽の楽しみ方を提案していきたいと思っています。

このように、美術館をより身近に感じていただくために様々な催しを用意して皆様をお待ちしております。週末の予定を立てるときなど、ぜひ美術館をご利用ください。

(美術学芸員 小西 珠緒)

※詳細については年間スケジュールや館内チラシをご覧ください。ホームページでも最新情報をお知らせしています！ (<http://www.lalnet.gr.jp/kinbi/index.html>)

さらに…

ハイビジョンギャラリーでは所蔵作品によるオリジナル番組などを、**データベースコーナー**では所蔵作品のうち約1600点を鮮明な画像でご覧いただくことができ、作品情報の検索も可能です。展示されていない作品の中から自分だけのお気に入りを見つけたり、調べ物にもご活用ください。



『発見！わたしの線・形・色』2000.10.29

自由な形に切り抜いた色画用紙を組み合わせ、ひとつの画面をつくりました。その体験をもとに、開催中だったナビ講座に展示された作品を、色と形の図から鑑賞しました。



『ジャズ・イン・ミュージアム』2001.3.4

ジャズカルテットを招き、エントランスホールで演奏を行いました。

平成13年度 下半期の展覧会案内

「日本画の三人 大矢紀・三輪晃久・山崎隆夫展」 9月15日(土)～10月28日(日)
「有元利夫展」 2月16日(土)～3月24日(日)

平成12年度 新収蔵品

世界の美術

版画

- ◆ ジャック・カロ《使徒たちの殉教》16点組 1635年 エッチング
- ◆ フェリックス・ヴァロトン《ラ・ベビニエール》1893年 カラー・リトグラフ
《小さな浴女たち》10点組 1893年 木版
《エドガー・ポーの肖像》1894年 木版
- ◆ ヘルマン・マックス・ベヒシュタイン《或る村》7点組 1918-19年 木版
- ◆ クルト・ブフィスター著「現代ドイツ版画家集」ライプツィヒ、1920年（オリジナル版画23点 1913-20年）

日本の美術

日本画

- ◆ 尾竹越堂《渡し》大正初期 紙本彩色
- ◆ 土田麦穂《春宵舞妓図》1923年 絹本彩色
- ◆ 横山操《TOKYO》1968年 紙本彩色
- ◆ 平松礼二《ノルマンディの夢の季》1998年 紙本彩色
- ◆ ＊ 《ノルマンディ曇色(エトルタ)》1999年 絹本彩色
- ◆ 中野嘉之《野火》2000年 紙本彩色
- ◆ ＊ 《生命の讃歌一鹿(黒月)》2000年 紙本彩色
- ◆ ＊ 《生命の讃歌一鹿(白月)》2000年 紙本彩色

洋画

- ◆ 吉原治良《静物》1929年 油彩・カンヴァス

版画

- ◆ 「現代の洋画」第23号 1914年
太田三郎《カフェーの女》 木版
岡本歸一《静物》《夕の街路》《風景》 木版
池田永治《早春》 木版
- ◆ 深澤索一《わらびと筍》1930年代 木版

工芸

- ◆ 津田信夫《鑄銅鳳凰置物》1939-40年 鑄銅

書

- ◆ 比田井南谷《作品25》1956年 墨・ラッカー・ファイバーボード
《作品64-25》1964年 墨・鳥の子

写真

- ◆ 渡辺義雄「古寺大観」より30点 1969-78年
モノクローム・プリント
- ◆ ＊ 「戦後の東京」「イタリア」より15点 1956年
モノクローム・プリント

デザイン

- ◆ 田中一光《華麗なる靴》サルヴァトーレ・フェラガモ展ポスター 5点組 1998年
- ◆ 永井一正《Life》ポスター6点組 2枚セット 1999年

新潟の美術

洋画

- ◆ 高村真夫《裸婦》1921年 油彩・カンヴァス
- ◆ 佐藤哲三《柿を持つ女》1934年 油彩・カンヴァス
- ◆ ＊ 《柿》1952-53年頃 油彩・カンヴァス
- ◆ 鈴木力《海に向かって(シシリア)》1999年 油彩・カンヴァス

彫刻

- ◆ 鳥田美晴《牙彫蓮置物》制作年不詳 象牙
- ◆ 北村正信《裸婦立像》制作年不詳 大理石

工芸

- ◆ 齋藤三郎 陶磁器60点 1939-81年

表紙作品解説 横山操《満月潮》1968年

横山操は1920年新潟県吉田町生まれ。混迷していた戦後日本画壇にあって、ダイナミックな画面と新鮮な題材で注目されました。この作品は六曲一隻の屏風で、画面手前には黒い岩にぶつかり白く泡立つ波、沖にははっきりと丸い月が浮かんでいます。月の静けさと波の激しさ、装飾性と写実性など、相反す

る要素がひとつの画面に盛り込まれていますが、全体からは静謐な印象を受けます。この時期、日本の伝統的な絵画が見直され、装飾性や空間表現を取り入れた作品が盛んに描かれました。本作品もその流れの中に位置付けることができるでしょう。水墨と色彩の融合をめざした晩年の操の意識を強く表しています。

美術館友の会からのお知らせ

◎平成13年度会員募集

新潟県立近代美術館友の会は、美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて、会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。

常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。

会員期間は平成13年4月1日から翌年3月31日までの1年間です。

◎これからの事業予定

- ・ 友の会作品展(会員の作品展)
- ・ 海外研修旅行(ミュンヘン・ウィーン)
- ・ 県外研修旅行 他

◎友の会作品鑑賞会

「ココロの形・カタチの心」

4月25日(水)14:00～

※企画展示室ロビーにお集まりください。企画展無料観覧券をご利用ください。

【問い合わせ先:友の会事務局】

TEL.0258-28-4111】

利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館(8/13(月)、9/3(月)は開館し翌日も開館)および、9/10(月)～9/12(水)、12/25(火)～1/3(木)、3/25(月)～3/29(金)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(後期)・遠征・高等専門・大学……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮開町字居街278-14 940-2021

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2001.4.1発行 4,000部

「鳳凰堂の彫刻」 その2

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

前回、「国宝平等院展」にちなんで、平安時代の天喜元年(1053)に大仏師定朝とその一門が造った鳳凰堂の彫刻について考えるところを記しました。そこでは仏像と自然との間に新たな親和的關係が生み出されたことを述べました。そこに定朝によって完成された和様彫刻の一面を見ることができますが、日本彫刻史の上での大きな転換点に位置する鳳凰堂の彫刻については未だ別のさまざまな面から語るべきことがあります。今回は仏像の体型という面からそれを眺めてみます。

人間の体型に大きく分けて虚の体型と実の体型がある、ということを経典学教授であった解剖学者、故三木成夫氏が説いておられました。胸が薄くて後ろに引け、腹の方が前に突き出すのが虚の体型で、逆に胸が厚く前方に張り出すのが実の体型であるといえます。虚と実というのはおそらく東洋医学からの考え方でしょう。体型の虚実には仏像にもよくあてはまります。元來、インド・ガンダーラで始まった仏像は実の体型でした。これを受けて中国の仏像もはじめは実の体型です。たとえば雲岡の石仏は胸を張った堂々たる偉丈夫の姿です。虚の体型が見られるのは中国の南北朝時代でもそれより少し後、北朝でいえば北魏後期の仏像からで、それは当時の南朝の爛熟した貴族文化の影響によるものらしい。そこで理想とされた弱々しい虚の体型をかりて仏像の肉体性を抑え、精神性・神秘性を強調したと見られます。飛鳥時代、日本で仏像が造られはじめた時期に、その手本となったのはそのような南北朝時代の仏像でした。だから法隆寺夢殿の救世観音像にはまさに典型的な虚の体型が見られます。この像では胸の前で宝珠を捧げる両手まで、胸を後ろに引いた体型を利用しながら一本の材から彫り出し、みごとな側面観にまとめています。しかし中国ではインドの影響が再び強まる南北朝末から実の体型が復活して唐代に至ります。その影響で日本でも天平時代になるとそれが支配的になりました。薬師寺金堂の薬師如来像もその好例といえます。実の体型は次の平安時代にも引継ぎました。

ところがこの間にも菩薩の像は虚の体型に造られることがありました。このことは中国の絵画で女性の表現には主として虚の体型、男性像では主として実の体型といった描き分けが見られることと関係がありそうです。体型の虚と実、実際には男女の双方にあるのですが、絵画表現の上で男性のたくましさを実の体型、女性のやさしさを虚の体型であらわしたといえるでしょう。実の体型が主流の時代に菩薩像に虚の体型が用いられたのは、如来とはちがひ、悟りの世界から人間界におりてきて衆

生の救済につとめるというその性格にふさわしい、女性的なやさしさの表現が求められたからだと思います。

ここでようやく鳳凰堂の彫刻を登場させます。本尊阿彌陀如来像は、背中がちょっと丸くなっており、胸が薄く腹が前に出てきています。虚の体型が再び現われたのです。この像は大変穏やかなやさしい顔をしています。体つきの上でもまさにやさしさを表現しているわけです。同じ虚の体型ながら飛鳥時代の像ではそれが神秘性の表現につながっていたのに対し、ここではもっばらやさしさの表現に結びつきます。そして天平時代以来これまでの仏像が堂々と胸を張って力強さを感じさせたのに対して大きな転換を遂げたといえます。極楽浄土の阿彌陀如来に救いを求め、その慈悲に頼った時代、そして女性が華かに活躍した藤原貴族文化の時代にこそ生れた仏像様式というべきでしょう。



平等院鳳凰堂 阿彌陀如来像 定朝作 天喜元年(1053)



同上